HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	2023年度第1回研究会『触の祭典「ユニバーサル・ミュージアム さわる！めぐる物語」』見学会及び研究会 :「さわる展示」の先にあるもの 開催報告
Author(s)	島, 絵里子
Citation	全日本博物館学会ニュース, 146, 6-11
Issue Date	2024-01-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/91219
Type	article
File Information	Gakkai_News_146_6-11.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

2023 年度　第 1 回研究会
『触の祭典「ユニバーサル・ミュージアム さわる！めぐる物語」』見学会及び研究会：「さわる展示」の先にあるもの　開催報告

日　時：2023 年 12 月 11 日（月）
　　見学会　13:30 ～ 15:30
　　研究会　15:30 ～ 17:30
会　場：
　見学会　ボーダレス・アートミュージアム NO-MA 及びまちや倶楽部で開催中の展覧会『触の祭典「ユニバーサル・ミュージアム さわる！めぐる物語」』
　研究会　アンドリュース記念館及びオンライン（Zoom）によるハイフレックス開催
参加費：無料
主　催：全日本博物館学会
協　力：ボーダレス・アートミュージアム NO-MA
参加者：見学会　10 名（対面のみ）
　　研究会　74 名（オンライン 64 名 及び対面 10 名）

1．開催趣旨

ICOM による博物館の新定義（2022 年 8 月採択）には、“accessible and inclusive”（誰もが利用でき、包摂的であって）、“diversity and sustainability”（多様性と持続可能性）、“with the participation of communities”（コミュニティの参加とともに）、“reflection”（省察）、“knowledge sharing”（知識共有）といった言葉が初めて明記された。また、日本国内においては、2022 年 4 月の博物館法改正において、博物館法の目的について、社会教育法に加えて文化芸術基本法の精神に基づくことが定められたほか、博物館は他の博物館等と連携すること、及び地域の多様な主体との連携・協力による文化観光その他の活動を図り地域の活力の向上に取り組むことが努力義務とされた。このような中で、博物館がより人々に開かれ、多様な学びが生まれることが期待される。

そこで本研究会では、ボーダレス・アートミュージアム NO-MA（以下、NO-MA）を訪ね、展覧会『触の祭典「ユニバーサル・ミュージアム さわる！めぐる物語」』（会期：2023 年 10 月 7 日～ 12 月 17 日）を体験する。本展の特徴は、彫刻や絵画、歴史資料など、会場内にあるすべての作品をさわって体験することである。「さわる」といってもその方法はさまざまであり、寝転がったり、覆われたりするなど全身を使うこともあれば、音を振動で感じ取るものもある。会場は NO-MA と、近江八幡市旧市街に残る町家や蔵等の歴史ある建物の維持保全・再活用を通じた地域の賑わい創出を目指す「まちや倶楽部」の二会場で、旧市街の町並みを歩くことができるほか、展覧会のワークショップなどのイベントも、地元のスワイバザールで行われた。また、滋賀県立美術館においても、ユニバーサル・ミュージアム展の出品作をはじめ、さわることのできる作品等の展示が、企画展『“みかた”の多い美術館展　さわる知る　読む聞くあそぶ　はなしあう　「うーん」と悩む　自分でつくる！』で行われた。

視覚に拘らない鑑賞を提示し、また、地域との連携・協力をすすめる本展について、見学会に続いて研究会として、『ユニバーサル・ミュージアム展』監修者である国立民族学博物館教授 広瀬浩二郎氏、NO-MA 石田瞳氏、滋賀県立美術館 学芸員 山田創氏の 3 名にご講演をいただく。そして、地域における博物館の今後の可能性について、「ユニバーサル」をキーワードに考えていく。

2．講演者

広瀬浩二郎 氏（国立民族学博物館 教授）
2021 年 9 月から 11 月にかけて、国立民族学博物館特別展『ユニバーサル・ミュージアム――さわる！“触”の大博覧会』を担当。「ユニバーサル・ミュージアム」（誰もが楽しめる博物館）の実践的研究に取り組んでいる。

石田瞳 氏（ボーダレス・アートミュージアム NO-MA）
展覧会『触の祭典「ユニバーサル・ミュージアム さわる！めぐる物語」』（2023 年 10 月 7 日～ 12 月 17 日）を担当。

山田創 氏（滋賀県立美術館 学芸員）
企画展『“みかた”の多い美術館展　さわる知る　読む聞くあそぶ　はなしあう　「うーん」と悩む　自分でつくる！』（2023 年 10 月 7 日～ 11 月 19 日）を担当。普段はあまり美術館に来ない方に提案してもらった理想の“みかた”の実現に取り組んだ。また、「ユニバーサル・ミュージアム展」の出品作をはじめ、さわることのできる作品の展示のほか、自分で手を動かして「つくる」コーナーを展示室内に展開した。

3．プログラム

13:30-15:30　NO-MA 及びまちや倶楽部での見学会：広瀬氏によるギャラリーツアー
15:30-17:30　研究会
　開会挨拶・趣旨説明　島 絵里子（北海道大学）

講演１　広瀬 浩二郎氏による講演
『ユニバーサル・ミュージアムとは何か－視覚障害者発の触文化展が問いかける「光」の意味－』
講演２　石田 瞳氏による講演
『触の祭典「ユニバーサル・ミュージアム さわる！めぐる物語」―地域とつながる美術館』
講演３　山田 創氏による講演
『美術館をひらくこと：滋賀県立美術館「“みかた”の多い美術館展」事例紹介を中心に』
全体質疑応答

４．見学会概要

展覧会は、全部で６つのチャプターで構成されていた。〔0. 試触コーナー / 1. 彫刻を超克する / 2. 風景にさわる / 3. 音にさわる〕（第一会場の NO-MA）、〔4. アートで対話を拓く / 5. 見てわかること、さわってわかること〕（第二会場のまちや倶楽部）である。本見学会での広瀬氏によるギャラリーツアーも、チャプターの順番に沿ってすすめられた。

〔０．試触コーナー〕（NO-MA　１階）

最初は、さわることに慣れてもらうためのセクションだという。広瀬氏は、さわる展示を様々な場所で行ってきたが、子どもはわぁっとさわるけれども、大人は意外とさわらないということを経験してきたそうだ。そこで、本展覧会は、「さわってもいい展覧会」ではなくて、「さわらないといけない、さわらないと分からない展覧会」であるから、まず、普段の「見るモード」から「さわるモード」になるべく早く入ってもらえるように、この導入セクションをつくったという。

最初に出合うのが、《触れるひと》（2020 片山博詞）である。ここで、広瀬氏が「さわる」ということを説明するときによく行うという「こんにちは、元気ですか、さようなら作戦」が紹介された。まず、彫刻《触れるひと》と友達になるような感覚で、「あ、こんにちは」と、友達の肩をたたくような感じでさわる。次に、「元気ですか？」と全体を確認するようにさわる。最後は、「じゃ、またね」みたいな感じで、じっと手を置いて、作品と自分がつながっているような感覚を味わうのだという。この作戦を子どもたちに伝えると、優しく丁寧にさわるということが伝わると感じているとのことだった。

そして、この作品のもう一つの特徴が紹介された。それは、《触れるひと》の触れる先に、もう一人の自分がいるということ。さわるということは、直接的には外にあるものに手を伸ばしてさわるのだけれど、その先には自分の内面との対話があるということを形として表現した作品だという。

〔１．彫刻を超克する〕（NO-MA　１階）

ここから暗い空間に入る。なぜ、暗い空間にしているのか。それは、前述の「大人はなかなかさわらない」という経験から、触覚を促すために、普段の「見たら分かる」の「見る」をなるべく制限するために暗くしているのであり、視覚障害の疑似体験のためではないこと、さわることを促すためであることが強調された。

作品へのさわり方として、正面からだけでなく、色々な方向からさわってみることの重要性も紹介された。《触覚の月》（2023 高見直宏）は、壁から大きな月がつき出すように展示されているが、その下にもぐり込んでさわったり、あるいは、背と手を伸ばしても上までは手が届かず全体をさわれないことで、その上の部分を想像したりできるのも、この作品の特徴だろうとのことだった。

〔２．風景にさわる〕（NO-MA　蔵）

次に、NO-MA 裏側から外に出て、蔵へ。本セクションは、風景というのは目だけで捉えるのではなく、体全体で感じられるのではないかということを問いかけるセクションだという。

そして、本会場ならでの特徴についても語られた。NO-MA は昭和初期の古民家を再利用した空間のため、蔵までの移動時も、扉を開け、暗い空間から明るい外を通って来た。一般的な美術館であれば、暗い空間には明かりが入らないようにするが、ここは「家」だから、窓や扉が開けば光が入ってくるというのも自然で、よい空間になっていると感じているとのことだった。

《彫刻『神奈川沖浪裏』》（2021 戸坂明日香）は、波の迫力を触覚的にあらわし、身体感覚として伝えようとするものであり、風景画を体で理解するための一つの試みだという。葛飾北斎の富嶽三十六景の中の『神奈川沖浪裏』は、視覚障害関係でも触図、さわる絵にする取り組みがあり、複数のパターンがあるという。それに対し本作品は、北斎の絵を伝えるレプリカ作成という発想ではなく、北斎の元図を彫刻家が翻案した新たな作品というふうにとらえられるのではないか、と述べられた。

〔３．音にさわる〕（NO-MA　２階）

蔵から戻り、NO-MA の２階へ。窓からも日差しが入る、明るい空間であった。スリッパを脱ぎ、畳の部屋へ。ここは、音は耳で聞くだけではなく、体で感じることができるのではないかと問いかけるセクションだという。

《土の音》（2008 渡辺泰幸（写真 1））では、参加者が作品を振ったり、転がしたり、手を鈴の上にのせて何個もの鈴を大きく動かしたりと、様々な動きがみられた。

それとともに、りんりん、からからん、じゃらじゃらじゃら…など、様々な音が鳴った。広瀬氏からは、この小さな土の鈴は、1万個ほどあること、同じような形をしているけれど振ってみれば一つ一つ音がちがうこと、私たちは畳の上にいるから、手からも足からも振動は伝わってくるし、音を鳴らす感触が感じられることが語られた。

そして、美術館は静かに鑑賞するところが多いが、ユニバーサル・ミュージアムの場合は、このようにじゃらじゃらと音をたてて、しかも、さわっていると何か話したくなるので、知らない人同士が音を鳴らしながらおしゃべりする空間となっていること、このような、ある意味うるさい展示空間というのが、ユニバーサル・ミュージアム展の特徴なのではないかと述べられた。

〔4．アートで対話を拓く〕（まちや倶楽部）

NO-MA を出発し、近江八幡の町並みを歩いて、まちや倶楽部へ。本会場で最初に出合うのは、《てざわりの旅》（2021 わたる（石川智弥＋古屋祥子））である。本作品は、クスノキからつくられた木彫の耳なし芳一像であるが、さわっていると1箇所だけ、感触がちがう。見るだけでは気づかないことがある、視覚に頼らず芳一とともに旅に出よう、ここが「目に見えない世界」への入口だというメッセージが広瀬氏から伝えられた。

続いて、会場の内部へ。もともと酒蔵だった空間のため、広く、冬場でひんやりとしていた。

本セクションでは、包まれる、くるまれるといった体験ができるという。触覚は手だけでなく全身に分布しており、例えば、いま足で地面を感じたり、ひやっとした空気を顔で感じたりしているのも触覚であり、視覚・聴覚・味覚・嗅覚は人間の頭部に集中しているが、触覚は全身にあり、その、全身にある触覚を呼び覚ましてもらおうというのが本セクションの趣旨だと説明された。

まず、《境界 division - n - 2023》（2023 島田清徳）へ。およそ 800 枚のナイロン製の白い布が天井から下がっており、その中に入って自分の体と手で布をかきわけて進んでいく。広瀬氏からは、作品に入ると白い布の中に自分の体が包まれた感じがして、作品の中を進んでいるうちに自分とナイロンが溶け合うような感覚がして、自分との境目はどこか、境界が分からなくなるような体験だと語られた。

写真 1 《土の音》（2008 渡辺泰幸）

続いて、《attitude Ⅸ》（2013 守屋誠太郎）と《attitude Ⅳ》（2012 守屋誠太郎）へ。前者は金属製で、後者は木製であり、実際に広瀬氏が《attitude Ⅸ》の中に入って作品をこんこんとしたり声を出したりすると、音が会場内によく響いた。広瀬氏からは、近頃、「触角」という言葉（触覚ではなく触角（研究会で後述））をよく使うこと、本作品の中に入ることで、人間も本来はこのような触角をもっていたのではないかと問いかけるような作品だと感じていることが紹介された。

最後に、《Ninguen》（2017 冨長敦也）と《Love Stone Project》（2013-23 冨長敦也）へ。床に、複数のハート形の石が並んでおり、その奥に、人の形をした大きな石が横たわっている。参加者は、それぞれハート形の石を一つ選んで座り、広瀬氏の話を聞いた。《Ninguen》は、作家から「ぜひこの石に寝そべってほしい」と希望があったことや、実際にその上に寝そべってみると、自分の体温が石にうつり、どこまでが石でどこからが自分なのか、その境目がだんだんなくなっていき、自分と石がつながっていくような感覚になったことが、広瀬氏から紹介された。

〔5．見てわかること、さわってわかること〕（まちや倶楽部）

暗い空間での触覚中心の鑑賞が続いたが、最後は明るい空間へ。暗い空間のままで終わると、不自然な、非日常な体験で終わってしまうだろうから、そうではなくて、最後に明るいところに戻ってきて、見るのもいいしさわるのもいいし、両方やるとさらに楽しいよね、という体験を来場者に持ち帰ってほしいという思いが、最後に語られた。

見学会はここで終了し、研究会会場であるアンドリュース記念館へと向かった。

5．研究会概要

(1) 広瀬氏による講演『ユニバーサル・ミュージアムとは何かー視覚障害者発の触文化展が問いかける「光」の意味ー』

はじめに、3つのキーワード―①「へだたり」：自分史と盲人史の往還、②「つながり」：書籍の「さわる表紙」にこだわる理由、③「かかわり」：博物館がライフワークの舞台となる―が提示された。

まず、「へだたり」。「ユニバーサル」という言葉を使う原点として、琵琶法師や瞽女の芸能が紹介された。江戸時代以前に全国で活躍していた目の見えない琵琶法師や瞽女の旅を可能にしたのは、ごく自然な助け合い、相互扶助と、全身の「触角」センサーにあったのではないか。「触角」は、「触覚」ではなく敢えて「角」という字を使う。「ユニバーサル・ミュージアム」というのは、近代化の流れの中で視覚に偏り失われていってしまった、人間が本来持っていた「触角」センサーを取り戻す、そういう実験の場所なのではないかという考えが語られた。

さらに、「インクルーシブ」やSDGsの「誰一人取り残さない」という表現については、誰が誰を取り残すのか、そこにはまだ、取り残す側と取り残される側、さらに言うと、取り残す側は健常者で取り残される側が障害者だという、マジョリティとマイノリティの関係みたいなものが、そこに無意識のうちに内在しているのではないかという指摘がなされた。そして、安易にインクルードしていくだけではなく、それぞれの個性を尊重するという、敢えてへだたっていることの重要性について、まさに琵琶法師や瞽女の芸能は、へだたっているところに意味があったと紹介された。

次に、「つながり」。マジョリティとマイノリティの関係にどうつながりをつくっていくか。ここでは、書籍の「さわる表紙」にこだわる理由が紹介された。表紙に点字や触図、さわる絵を入れることで、読者である目の見える人たちに、目で文字を読む人もいれば、手で文字をさわって読む人もいるんだということに気づいてもらう、さわることへの動機付けをする、そういう入口にしたいと考えているという。

最後に、「かかわり」。ここでは、ユニバーサル・ミュージアムの理念に関する話題がなされた。

まず、国連の障害者権利条約策定の過程でスローガンとして掲げられた「nothing about as without us」(「私たちのことを私たち抜きで決めないで」)について。これは、障害者のことを決めるのであれば障害者の当事者がきちんと意見を出し合って決めないといけないということを改めて確認するものであったという。博物館の来館者サービス等を考えるときも、その当事者の意見をきちんと聞くということが大前提になってくる。一方で、「us」(「私たち」)とは誰なのか。それが、閉じた私たちであってはならない。障害者のことは障害者にしか分からないから健常者は口を出すなとなってしまうと、対立を助長してしまう。そうではなくて、「us」(「私たち」)の幅をどれだけ広げていけるか、障害者当事者と一緒に考えて言い合える健常者を増やしていく姿勢が大事なのではないかという指摘がなされた。

次に、日本の戦後の障害者福祉について、糸賀一雄氏の思想「この子らを世の光に」が紹介された。糸賀氏は、知的障害、重度心身障害の子どもたちの施設を先駆的につくり、それまで一般的であった「この子らに世の光を」という思想から、重度知的障害の子どもたちを主体として認識し、それを世の光にしていかないといけないと述べ、その思想は現在も滋賀に継承されているという。一方で、広瀬氏は、滋賀でユニバーサル・ミュージアム展を行うにあたり、糸賀氏の思想をさらに発展させて、「この子らから世に光を」を掲げたという。「この子ら」というのは、ユニバーサル・ミュージアム展を訪れる全ての来場者であり、この新たな展覧会を体験した人から、新しい光を、世に届けていく。その試みが、今回の滋賀のユニバーサル・ミュージアム展だと考えているという。

そして、「光」について。人間が肉眼で捉えるのは光のごく一部であって、目に見えない光を感じる有力な手段として、「さわる」ということがあるのではないか。そのような、目に見えない情報というものを「さわる展示」で体感することによって、「光と闇」のような、単純に分けている発想、近代的な二項対立を乗り越えていく。そのような体験から、本当の意味で、ユニバーサルというものが築かれていくのではないかという考えが語られた。

(2) 石田氏による講演『触の祭典「ユニバーサル・ミュージアム さわる！めぐる物語」―地域とつながる美術館』

ボーダレス・アートミュージアムNO-MAは、重要伝統的建造物群保存地区にある昭和初期の町屋をリノベーションし、2004年に開館した。「ボーダレス・アート」は、障害のある人たちによる造形表現や現代アートなど、様々な表現を分け隔てなく紹介していこうとする館の展示コンセプトである。

石田氏からは、本研究会の開催趣旨にもある、ICOMの博物館新定義の中の「コミュニティの参加とともに」博物館は活動するということや、博物館法の改正で、博物館、美術館の役割として「文化観光」や「地域の活力の向上」に取り組むことも明記されたことの紹介とともに、「地域とつながる美術館」という観点から、講演がなされた。

ユニバーサル・ミュージアム展の展示構成では、触覚にも集中できるよう、あえて視覚情報を遮る暗い空間から始まり、最後は明るくなる。これは、見える人が、暗い非日常的な空間でさわる体験をした後、見える日常に戻ったときに、やはりさわることでしか知ることのできない世界があるということを感じてもらえるよう、見てもさわっても楽しめる空間にするために、最後は明るい

空間にしたという。これは、美術館の中での体験が、地域に出たときに外での体験につながっていくことと重なるのではないかという考えが述べられた。

本展覧会と地域とのつながりとして、まず、NO-MAとまちや倶楽部の二会場での開催により、来場者が古い建物の残る道のりを町歩きできることや、まちや倶楽部は酒蔵を改修した複合施設で地域の活性化に取り組んでいること、地域の協力を得て文房具店やクリーニング店など町中に本展のポスター掲示をしたこと、そして、地域のスワイバザールにプロジェクトやワークショップを出展したことが紹介された。スワイバザールは、地域の食堂運営者が呼びかけ人となって地域の方々が出店しているイベントで、まちや倶楽部向かいの酒遊舘駐車スペースで開催されたという。

スワイバザールに出展したのは、「Love Stone Project NO-MA」という、作家の冨長氏がまちや倶楽部にもともとあった石を使って、その石をハートの形にして参加者と共に磨いていくプロジェクト（写真 2）と、「自分だけの鈴を作ろう」という、作家の渡辺氏の白い土鈴に、参加者が自由に飾りつけをするというワークショップで、どちらも、バザールに出店している地域の方々、観光客、通りがかりの方々の参加があり、地域交流の場ができたように石田氏は感じたという。

NO-MA は館自体が小さく館内でイベントをするスペースが限られているため、本展覧会の「音にさわる演奏会」と「映画上映会『手でふれてみる世界』＆アフタートーク」も酒遊舘のホールで開催したといい、館のスペースが小さいということは必ずしも悪いことではなく、必然的に、地域と関わりつながりながら、イベントや企画が生まれていることが報告された。

次に、ボランティアスタッフの活動について。今回、延べ 50 名のボランティア参加があったこと、そして、

写真 2　Love Stone Project NO-MA の様子
（提供：ボーダレス・アートミュージアム NO-MA）

さわる展覧会であってもさわることを躊躇する方もいる中で、ボランティアが率先して石の作品《Ninguen》（2017 冨長敦也）に寝転がるなど、さわることに関しても積極的に声をかけてくれたということが報告された。

最後にまとめとして、・「ユニバーサル・ミュージアム」自体が、美術館の中での体験と日常生活での体験が結びついていくことを目指しているのではないか、・美術館の内と外というボーダーを超えていくこと、・館内の活動にとどまらず（必ずしも来館につながることを目標とせず）、地域の一部として連携して交流を深めることで、美術館の外で活動していくことにより、多様な人たちの様々な参加の形が生まれるのではないか、・近隣施設や商店と協力することで、地域の活力が向上し、また展覧会の体験が地域生活とつながり、美術館がより身近な場になるという相乗効果が生まれるのではないか、ということが語られた。

（3）山田氏による講演『美術館をひらくこと：滋賀県立美術館「“みかた”の多い美術館展」事例紹介を中心に』

「“みかた”の多い美術館展」は、2023 年 10 月 7 日から 11 月 19 日にかけて、滋賀県立美術館で開催された。講演は、①ねらい：美術館をひらくこと、②背景：法律の確認、③課題：4 つの課題意識、④実践：「“ みかた ”の多い美術館」展という構成で展開された。

まず、①ねらいについて。展覧会のねらいは、美術館をより開いていくことだったという。

次に、②背景について。美術館を開いていくにあたっての法的根拠として、博物館法、ICOM 定義の変遷、障害者差別解消法（正式名称は「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」）、障害者文化芸術推進法（正式名称は「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律」）が紹介された。

博物館法には「一般公衆の利用に供し」という文言があるが、一般の人たちとは誰なのか、目が見えない人の存在を考えられていたかどうか、という指摘がなされた。続いて、障害のある方が来館した際に作品や展覧会、コンテンツにアクセスできない場合に配慮を行うことには、法的根拠があることが説明された。

③それらをふまえた上で、1：ハード充実への偏向、2：Category / Individuals 属性と個人、3：当事者と同じテーブルにつくこと、4：すべての人に居心地のよいデザインは可能か、という 4 つの課題意識が挙げられた。

1：ハード充実への偏向…ハード面が充実化される一方で、展覧会の内容やコレクションにアクセスできるプログラムを行っている館はどれくらいあるだろうか。よりソフトのことを考えていく必要があるのではないか。

2：Category / Individuals 属性と個人…「障害者」というくくりの中に、決して全体化できない、独立した個々からなる群像をイメージする必要がある。精神・知的障害者は同じ感受性をもった集団では決してなく、それぞれの趣味趣向を生きる個別の人たちであることを忘れてはならない。（引用：山田 2022（野間の間 vol.29 p.3））

3：当事者と同じテーブルにつくこと…「Nothing about us without us」。美術館でプログラムをつくるときには、実際に当事者に入ってもらうことを何よりも大事にしている。

4：すべての人に居心地のよいデザインは可能か…展覧会をつくる中で、重症心身障害のある人との対話の中、「われわれにとっては、点字ブロックがあるとちょっと大変」という思いが伝えられたという。誰かにとっての必要性は、もしかしたら誰かにとっての不便になるかもしれない。

④実践：「“みかた”の多い美術館」展について。上記の課題意識を抱えて、今までビジュアルな体験を前提にしていた美術館を変えていくようなきっかけになるように、展覧会を開催したという。開催にあたり、今まで美術館から遠かった人たちの観点、みかたを、展覧会の中に積極的に取り組むために、今まで美術館にあまり来なかった人たち＜遠藤さん親子、NPO 法人 BRAH ＝ art.、NPO 法人しが盲ろう者友の会、重症心身障害児施設えがお、救護施設ひのたに園利用者、サンタナ学園の方々＞とディスカッションをして、その人たちからアイディアが出たみかた、鑑賞方法を、館のコレクションをみる方法として生かして空間を作ったことや、その具体的な過程が語られた。

最後に、4 つの課題への応答として、〈みかた展の試み〉は、美術館との距離がある人たちと、ソフト（みかた）を検討し、それらを「○○障害の人に適した方法」というのではなくて、○○さんたちが考えた方法として、個別のニーズに基づいたものとして提示したということが、まとめとして述べられた。そして、ある人にとっては見にくい、違和感のある空間かもしれないが、その違和感を持ち帰りつつ、その違和感は何だったのか、あるいはその違う身体、心を持つ人と、いかに話し合いができるのかというきっかけにしてもらいたいというのが本展のねらいであったことや、違うもの同士で分断するのではなくて、異なりみたいなものを前提としながら、対話の中で、一緒に面白いものを作っていくことを重要視した取り組みであったことが紹介された。

(4) 研究会のまとめ

質疑応答後、講演者から一言ずついただいた。石田氏は、ユニバーサル・ミュージアム展の開催をとおして、見ないことが障壁ではなくて、それが作品を鑑賞する上での新たな面白さになっていることを実感したという。山田氏からは、「人」の重要性が語られた。広瀬氏からは、3 名の取り組みに共通するのは、多様な見方、新たな見方を提示することであり、さらに、「みかた」は「味方」であり、これまで美術館と縁遠い存在だった方が来館することによって美術館が変わっていくだろうと語られた。

6．見学会及び研究会を企画・開催して

「さわる展示」の先にあるものとは何だろうか。さわる先には、自分の内面との対話があること、さわることをとおしてその場にいる人との対話が自然に生まれること、全身にある触覚が呼び覚まされること、身体感覚をとおしての体験、境界のなくなるような体験が生まれること、そして、近代的な二項対立を乗り越えていくことで、ユニバーサルというものが築かれていくと、広瀬氏から語られた。石田氏からは、美術館の中での体験と日常生活での体験が結びついていくこと、美術館の内と外というボーダーを超えていくこと、多様な人たちの様々な参加の形が生まれること、美術館がより身近な場になるという相乗効果が生まれるのではないかということが語られた。山田氏からは、今までビジュアルな体験を前提にしていた美術館を変えていくようなきっかけとなること、違うもの同士で分断するのではなくて、異なりみたいなものを前提としながら、対話の中で、一緒に面白いものを作っていくことの重要性が語られた。

本展覧会の監修者（広瀬氏）からのメッセージには、以下の一文がある。「自らの身体を動かし、手を伸ばせば、他者、そして新たな自己にめぐりあうことができる」。

私自身も本展覧会に通うなかで、さわること、そして、さわるだけでなく身体全体で作品を感じるような感覚をとおして、作品のこと、自分自身のことに思いを馳せる時間につながった。その場にいた、初めて出会う方々と会話が生まれたことも多々あった。多感覚をとおしての新たな発見を誰かに共有したくなり、自然と会話が生まれるのかもしれない。

滋賀での本展覧会は 2023 年 12 月までの会期であったが、2024 年 7 月 6 日から 9 月 16 日まで、福岡県直方市にある直方谷尾美術館新館にて、「ユニバーサル・ミュージアム―さわる！“触”の大博覧会」直方巡回展が開催される予定である。「さわる展示」の先には何があるのか、今後また、様々な方々と話し合う機会をもつことができたら幸いである。

（島 絵里子　北海道大学大学院）